

---

# 死にたがりの僕は生きたがり

吉菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死にたがりの僕は生きたがり

### 【Nコード】

N2474Y

### 【作者名】

吉菜

### 【あらすじ】

死にたがりの主人公 吉村湧真。性別は女。そんな彼女はあることがきつかけで死にたがりになってしまった。そのきつかけとは・・・？だが死にたがりである彼女が死ぬことのできない生きたがりであった。矛盾だらけの彼女。そんなある日いつもの通学路で車に轢かれ死んでしまう。しかし死んだはずの彼女が目覚ますとそこは水の中。一体何があったのか？ここは何処なのか？最後に待ちつける運命とは？彼女は死ぬのか、それとも生きていくのか・・・？

## 僕の一日

僕は死にたがり屋です。

それなのに僕は死ねません。

手首を切った僕は無意識に手加減をしてしまうのです。

大量の薬を飲んでも、無意識の中死ぬことは無いという確信があるのです。

僕は、生きてたがり屋です。

\*\*\*

名前 吉村 湧真  
よしむら ゆま

年齢 16歳

誕生日 12月

身長 161?

体重 46?

友達関係は上々。

人からの印象は好印象。

先生からの印象は好印象。

勉強はそこそこ出来る。

運動神経は抜群。  
はつげん

そんな僕は女である。

そして・・・

病<sup>や</sup>んでいる。

\*\*\*

父「いつてらっしやい〜。」

「……………」

ガチャン……

《いってきます。》

僕は朝、だるくて声を出さない。

5時半に起床<sup>きじよう</sup>して6時40分に家を出る。

バスを乗換え1時間程度で学校に着く。

それから6時間授業をこなし、16時のバスに乗り家に着くのは1  
7時半・・・

家に帰って待ちうけているのがご飯炊きに風呂掃除に茶碗洗い。

就寝はほとんどの時過ぎである。

これが僕の一日である・・・。

死にたいのです。

キャラって意外と大事だよね。

やっぱさ、自分のキャラを固定しないと面倒って言うか・・・

ややこしくなるじゃん？

自分を作らなきゃ世の中やっていけないといいますが・・・

そのためには家族にさえキャラを演じないとボロがでちゃうわけで。

それを長い事続けると疲れるわけで。

ストレスとかも溜まっていくわけで。

で、実際の僕は病んでるわけで。

そんな僕の事情を家族や友達が知るわけなくて・・・

一人で泣いて、1人の時しか休める時がなくて・・・

でも1人が怖くて、そんで1人で勝手に孤独を感じてて・・・

死にたくて、死にたくて・・・

切った手首の血でノートに“死にたい”って書いてみたりして・・・

切った後の手首は痛くて・・・

泣くほどの痛さでもないのに涙が止まらなくて、今の気持ちをどう表現したらいいのかわからなくて・・・

泣き過ぎで息が詰まって、そのまま死ねたらなあって思ったりして・  
・

でも死にたくなって・・・

心の中で助けを求めるけど、誰に？

僕のすべては偽りなのに・・・

誰に助けを求めるの・・・？

神様？

今まで何度も“神”を信じようとしたけれど・・・

あなたは存在だから僕を助けてはくれないでしょう？

## 一度目の死

溢れる涙は何故か止まらなくて、止まらない涙のせいでまた涙が溢れだして、どうしたらいいのかわからない。

何故自分は泣いているのか、言葉にできなくて、表現できなくて、虚しくて・・・

いつもいつも何のために生きているのか・・・

人は何を思い、生きているのか不思議でたまらない。

自分も人間だけど、他の人の思いを理解したくてたまらない。

何故生きているのか、何故人を愛するのか、何故、何故、何故？

知りたくて、知りたくなくて・・・

\*\*\*\*\*

朝、僕は家を出た。

いつものバス停へ向かうため、車がないことを確認し、横断したつもりだった。

それなのに目の前には大きなトラックが一台いて、頭が真っ白になつて、それから . . .

僕の意識はぱったり途切れた。

## 新たな始まり(1)

ザバツ・・・

「ゲホゲホツ・・・何・・・これ、どーなってんの？マジあり得ないんですけど・・・。」

マジのマジであり得ない...何で水ん中？めっちゃ冷たいし、寒いし...頭可笑しいだろ...下手したらコレ死んでますけど。

つかどーなってんだコレは...イジメか...新手のイジメだろ...だったらこんなことに...ってあれ？

まてまてまて...ん？車に...跳ねられたような気がするの...自分だけだろうか...。

痛いところは無いし、傷もない...。

「死に損ねた...のかな？」

湧真は自分の手首を見つめた。

「きつたねー手首...。」

湧真ゆまは悲しそうに手首を擦る。

痛々しい傷がくつきりと、戒めるかのように残っていた。

「...何でこうなったんだろっな。」

返事なんかあるわけないのに応えを求めてしまう…  
応えがほしい…誰でもいい…誰でもいいから……

「…なーんて、応えなんか帰ってくるわけないよね。」

誰かが応えてくれるわけない。誰かが助けてくれるはずない。  
だってこれは、自分の問題だから。誰かが応えられることじゃない。  
こんなことになったのを知ってる人なんていない。応えは自分  
身にしか掴めない。

「なくなりたい…。」

1人は心地よくて、でもどこか寂しくて、泣きたくなって、幸せじ  
やない気がして…

それにここは本当に無のようで、音も無くて、心が冷たくなってい  
く…  
体もビシヨ濡れで、心も体さえも…

「森ん中で1人とか…飢え死にしろってことかな。」

涙が滲み目の前が歪んでいく。泣きたいわけじゃないのに…。

「やだ、やだ、泣くな、バカみたい…ガキじゃないんだからさあ、  
泣くなよ…。」

自分に言い聞かせるかのように弱々しい声で、きつい言葉を自分に  
投げかける。

その姿は痛々しく、強がっているようにしか見えなかった。  
湧真（ハルマ）はただ声を殺して泣いた。誰も聞いてないはずなのに、誰もい  
ないはずなのに、ただただ静かに泣いた。

\*\*\*

「疲れた！何で泣くだけでこんなに疲れるんだろ、ほんと嫌になるわ…ととと。」

腫れた目を擦りながら立ち上がると立ちくらみが襲ってきた。湧真はそのまま前のめりに倒れ込んでしまった。

「いったあー…ほんと今日ついてない…。」

両手を見てみると血が滲み、皮がべろつと剥けていた。

「痛い、絆創膏なんて普段持ち歩いてないし…これ放っておいたら絶対化膿するよね…てか傷が空気に触れて痛い。」

とり合えず、水は近くにある。

……よし、傷口を洗おう。

「うっ痛い…もーヤダ。死ぬ。砂入ってるし…泣くよ?」

1人ごとをブツブツブツと呟きながら湧真は必死に砂を穿りだした。

ガサッ

「え………何？」

草むらから突然気配を感じ、落ちていた木の枝を拾い辺りを警戒する。

ガサガサッ

「無理………！！！」

何かが出てきたが姿を見る前に湧真は猛ダツシユで森を駆けぬけた。無理無理無理！！怖いし、絶対太刀打ちできないっ！！これは逃げといた方が先決だ、うん。

ガサガサガサッ

ひいっ　　！！

追っかけてきてる………！！？

やだやだやだ！！

つか速いっ！！

追いつかれる　　！！

と思ったのもつかの間……

湧真の背中に激しい衝撃が襲って来るとそのまま押し倒され、身動きがとれなくなった。

顔は地面に押し付けられ、何に押し倒されてるのか全く分からない。恐怖と痛みが止まらない。

何をされるのかわからない恐怖。それとも、このまま殺されてしまふのかという恐怖。

湧真は恐怖のあまり意識を　　……手放した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2474y/>

---

死にたがりの僕は生きたがり

2011年12月8日02時57分発行